

Frontline Report

# Gartner社が示す“3～5年先のリアル” — 実装×基盤×人材力でAIネイティブ移行

10月28～30日にパシフィコ横浜ノースで開催された「Gartner IT Symposium/Xpo 2025 Japan」では、これからの企業システムとAI活用の道筋が示された。イベントは、主要テクノロジーとその実装戦略を共有する場として位置づけられており、「AIをどう導入するか」だけでなく「AI前提で業務そのものをどう組み替えるか」が正面から問われる内容となった。Gartner社は、AIネイティブな開発・運用への移行を中核に据えるべきと指摘する。小規模チームでも短サイクルでAI機能をプロダクト化する「AIネイティブ開発基盤」、学習と推論のサイクルを継続的に回す「AIスーパーコンピューティング基盤」を整え、「AIを付け足す」段階から「AI前提で設計する」段階へ舵を切ることが提唱した。

AIの姿も変わる。複数エージェントが協調する「マルチエージェント設計」、業務や業界に最適化された「ドメイン特化の小型モデル」が主流化し、万能モデル一択から用途別に組み合わせる運用へと移る。同時に、「先制的サイバーセキュリティ」や、データ/AI実行環境をどの法域に置くかを設計する「ジオパトリエーション」が実装の前提条件として強調された。これは“どこで動かし、誰が責任を負うか”に踏み込む制度×インフラ一体設計を意味している。

モデルは特化型へ細分化する一方で、現場のエンジニアに



は万能型のスキルが強く求められる。具体的には、プロンプト/エージェント設計、データ品質・RAG・評価設計、MLOps/コスト最適化、セキュリティ/ガバナンスまでを横断できること。スキルの陳腐化が速いため、学習・検証のサイクルを個人・組織で内製化できるかがポイントだ。

今後3～5年で問われるのは、①どの業務をどのエージェントに任せるか、②どの基盤で動かすか、③安全性と説明責任をどう担保するか、④AIを束ねる“万能型”人材をどう育てるか、という実務的な設計力だ。生成AIの“付け足し”を越え、AIネイティブに組み替える企業が、組織と人材の両輪で競争力を手にするだろう。

## Liquid AI東京ハッカソンで、CTC金融チームが特別賞獲得

10月11～12日、Liquid AIが東京でハッカソンを開催。60名超・約30チームが、Liquid AIのLLM/VLMモデル等のファインチューニングやアプリ実装に挑戦した。CTC金融チームは、日常会話から認知症リスクを検知するヘルステックサービス「Dialognosis(ダイアログノシス)」を構築し、3位相当のSpecial Awardを受賞した。

## JADAA主催オルタナティブデータ分析ハッカソンで、CTCチームが3位入賞

日本オルタナティブデータ推進協議会(JADAA)主催のデータ分析ハッカソンで、CTC金融チームがプロのクオンツやデータ分析専門家のチームがひしめく激戦を制し、総合3位に入賞。Snowflakeを活用し、ニュース・テレビ情報等のデータを統合解析し、報道が求人市場へ与える影響を可視化する取組で存在感を示した。

## 日本のソブリンAI―「もしChatGPTが使えなくなったら？」から考える組織戦略

ソブリンAIとは、データ・計算資源・AIモデルの開発／運用を自国の法域の管理下で継続利用できるような設計する考え方だ。ChatGPT など海外サービスへの依存が高まる中、提供条件や地政学要因でアクセスが制限される事態に備え、国家主権（自国の法域・電力・計算資源の管理下で動かせる）と組織主権（自社の裁量で切替・監査できる）を確保し、業務継続性（BCP）を守ることが狙いである。

日本のテーマは大きく3つ。まず、デジタル公共インフラの整備。国内クラウドやオンプレミスをハイブリッドに組み、ワット・ビット連携（電力〈Watt〉とデータ〈Bit〉の統合設計）で最適化する。次に、モデル／データの主権。日本語・日本法・商慣習に強い国産LLM（PLaMo等）を育て、国内データで継続学習・評価を回す。個人情報保護・監査ログ・ポリシー適用などの運用ガバナンスも初期から組み込む。

そして、AI人材・組織能力の育成。RAG、MCP等の相互運用、AIエージェント設計にまたがる技能を横断的に育てる。

金融機関に引きつけば、勘定系・市場系の低遅延、データ越境の抑制、障害時のBCP等が守備範囲だ。実務的には、海外サービスをメインにしつつ、国内クラウド／オンプレ等の代替手段を確保し、約款・開示の要約、規制文書RAG、KYCや通話録音のマルチモーダル処理、不正検知補助などを切替可能にしておくことが求められる。

「もし、ある日突然ChatGPTが使えなくなったら？」―そのリスクから人と業務を守る取組がソブリンAIである。どこで学習し、どこで動かし、誰が責任を負うかを明確化し、クラウド／オンプレ、商用／国産、言語／非言語などの複数の要素を適材適所で組み合わせる設計力と、それを担う人材基盤が、今後の競争力を左右するだろう。

### ソブリンAIテーマ

公共インフラ  
整備

国内モデル/  
データ主権

AI人材・組織  
能力育成

## Crossroad Special

### ベトナム x AI開発 x アジャイル



金融NEXT企画部  
柳川 陸 さん

9月から2か月ベトナムのハノイに滞在しました。朝はバイクの波を縫って出社しつつ、屋台のバイ

ンミーやフォーで腹ごしらえ。週末はホータイやホアンキエム湖を歩いて頭をスッキリとリセットしていました。

業務としては、現地エンジニア達と生成AIを活用した生産性向上サービス「C-CodeBlossom」のマルチエージェント化に取り組みました。私は、要件に即して安全にコードを出し分ける“コーディングエージェント”を担当しました。現地

メンバ中心のスクラム体制のもと、JetBrains + AI AssistantやDify、ChatGPTを使い分け、手戻りを最小化することを意識していました。

特に印象的だったのは、現地AIエンジニアの高い実装力と、README起点で設計意図を共有する徹底ぶりです。Ubuntu／macOS中心の環境が整い、議論は「課題分解→検証」の回転が速いです。ヒエラルキーより役割で意見が通り、デイリースクラム後の小さなペア作業とAIアシスタントで疑問を素早く解消、レビューはチェックリストで非同期的に進みます。職場の距離感は近すぎず遠すぎず、差し入れや食事の誘いなど、自然なおもてなしが心理的安全性を高め、スピードと品質の土台になっていました。日本のユースケース志向とも相性がよいので、私はベトナムとのコラボレーションを自信をもっておすすめします！



無限の未来と、幾千のテクノロジーをつなぐ。

CTC Financial Services Group



CTC金融事業グループの最新情報は  
オウンドメディアサイトへ！

<https://financial.ctc-g.co.jp/>



お問い合わせ

**CTC**  
Challenging Tomorrow's Changes

伊藤忠テクノソリューションズ  
金融事業グループ金融NEXT企画部

✉ [fsgnext-biz-dev@ctc-g.co.jp](mailto:fsgnext-biz-dev@ctc-g.co.jp)